

大分県下における近世墓地発掘調査の成果と課題

— 大分市域周辺の近世墓地調査事例を中心に —

吉田 寛

はじめに

近年、大分県下では道路建設や区画整理事業などの大規模開発の際に撤去あるいは破壊される近世墓地を遺跡として認識し、開発行為に先立つ事前の発掘調査が実施されるようになってきている。近世墓地を構成する近世墓は、上部構造である石製墓標と下部構造である埋葬主体の墓坑で構成され、調査は通常、①墓標調査・②改葬時の立会い調査・③墓坑調査の三段構えで行われる。墓標調査では発掘作業を伴わず、平板測量等による墓標の分布図の作成や墓碑銘の判読、個別の墓標の実測図や拓影図の作成などが行われる。改葬時の立会い調査は、墓地の所有者・管理者が改葬を希望する場合に行われるもので、改葬中に発見される人骨や副葬品の状況を改葬作業に差し障りのない範囲で確認し、写真撮影や実測などの記録を行うものである。墓坑調査では発掘調査を伴い、通常の発掘行程に沿って表土剥ぎ・遺構検出・個別遺構の発掘と記録等がなされる。以上の3段階に渡る近世墓地の調査手順は、大分県下における近世墓地調査の現状でのスタンダードとなっている。この調査法は、一九八六年に実施された九州横断自動車道建設に先立つ女狐^{めはる}近世墓地（大分市机張原^{きょうげん}・以下、女狐墓地と略称⁽¹⁾）の発掘調査で確立された。当時は九州内はもとより、全国的にみても、近世墓地を考古学的な調査対象とした事例は少なかったため、調査担当者⁽²⁾は手探りの状態で自らの調査方法を探究し、確立しなければならなかった。認知度が低かった近世墓地を積極的に「遺跡」

として認識し、考古学的のみならず、地域の歴史を物語る雄弁な資料として位置づけようとした当時の関係者の努力は高く評価されるべきものであろう。

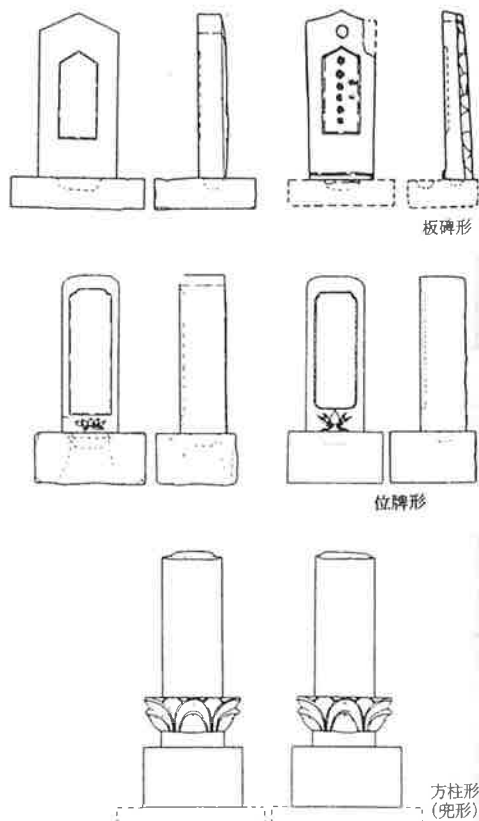
女狐墓地の調査方法と発掘調査の成果は、その高い問題意識と多大な成果を有する内容にかかわらず、報告書の刊行が遅れたこともあり（発掘調査は一九八六年、報告書刊行は一九九六年）、当時ようやく萌芽しつつあった近世考古学の分野では全国的な注目を受けたとはいい難い。しかし、その後、大分県下では女狐墓地の調査法を規範とした近世墓地の発掘調査が実施されるようになり、女狐墓地の報告書は近世墓地調査のマニユアルとして、あるいは基本文献としてなくてはならないものとの評価がなされている。さらに近年では女狐墓地と同様に、大分市中尾近世墓地（以下、中尾墓地と略称²）や山香町小野家墓³地において墓標が撤去される以前の段階から調査が実施され、墓石と墓坑がセットで発掘調査が行われる事例も増加しつつある。このような状況を踏まえ、県下の近世墓地発掘調査で得られた若干の新知見を以下で記すこととしたい。

上部構造の検討 — 石造墓石などの特徴と形式・型式変遷 —

筆者の近世墓地に関する調査経験が大分市周辺に限られるため、以下の記述が、当該地域からの知見を主体にしたものであることを最初にお断りし、現在筆者が関心を持っている点を項目ごとに述べていきたい。

石製墓標の形式と型式変遷 大分市域周辺で、最も一般的に見られる石製墓標の形式は、板碑形・位牌形・方柱形（兜形）である。板碑形は墓石頭部の正面観が二等辺三角形を呈するもの、位牌形は墓石上部の正面観が弧状をなすもの、方柱形（兜形）は墓石の水平断面が正方形を呈し、屋根の寄棟表現が退化した形態の頭部を有するものである（第1図）。以上の三者は互いに存続時期を重ねながらも、時期ごとの盛衰が認められる。すなわち、極めて大雑把に言えば、板碑形は一七世紀代、位牌形は一八世紀代、方柱形（兜形）は一九世紀代に盛行する傾向が伺える。

江戸時代中期以降、石製墓標の形式の主体となる位牌形墓石は、その形状から型式変遷は緩慢なように思えるが、実際の調

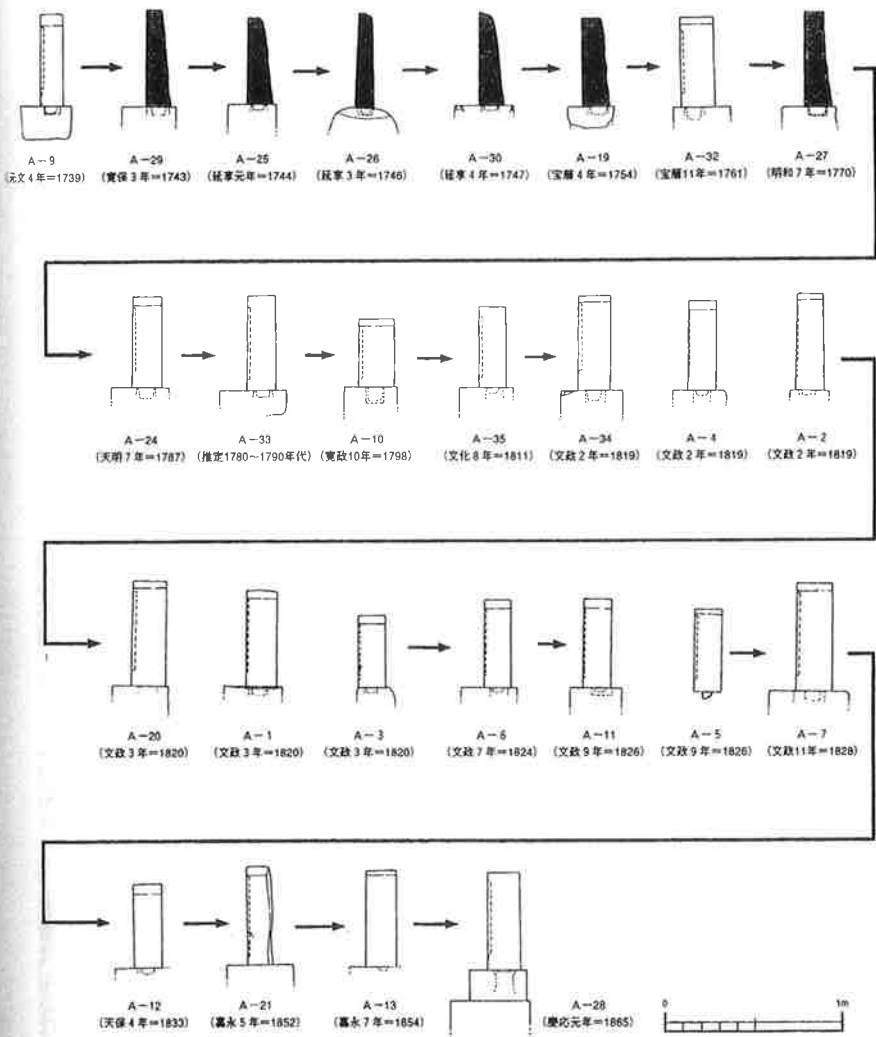


第1図 墓石の主要形式 (註1文献より)

查所見からは比較的明瞭な型式学的変遷が追跡できる。大分市中尾墓地A区では石造墓石を有する墓三五基の中で、位牌形(凝灰岩製のものに限る)は二六基で、全体の約七四パーセントを占める。その存続期間は元文四年(一七三九)から慶応元年(一八六五)の一二六年に及んでおり、年代ごと墓石を配列すると、その型式学的な変遷が明らかになる。すなわち、一七四〇年代から一七七〇年代の位牌形墓石の大半はその側面観が薄く、台形状を呈し、背面の整形度が弱い形態となる。それに対して、

一七八〇年代以降は基本的に側面観が厚い長方形となり、背面の整形度が強い形態となる(第2図)。個々の墓石にはこの型式学的な傾向が必ずしも当てはまらないものもあるが、それらは紀年と実際の造立年代が異なるものや墓石のグレードと関係するものである可能性がある。中尾近世墓地の位牌形墓石のように、その形態が比較的単純なものでも、型式学的な特徴は側面観にあらわれ、紀年銘等を有しないあるいは判読できない墓石でも一定の精度で年代を判別できる可能性が考えられる。考古学でいう型式学概念が、近世の石製墓石にも基本的には適用できることを再確認し、今後各地の事例や各墓石形式の型式変遷を把握していくことが期待される。

墓石の素材と石材産地 大分県下の石造物の大半は凝灰岩で造られている。これは大分県が凝灰岩地帯に位置することに加



第2図 中尾近世墓地A区における凝灰岩製墓石側面観の変化

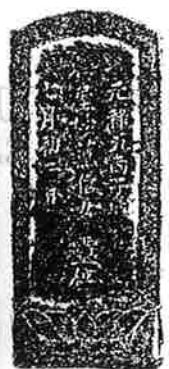
中尾近世墓地A区では、元文4年(1739)より、位牌形墓石の製作が開始される。1740~1770に製作されたものの大半は、側面観が台形状を呈し、背面の整形度が弱い形態(図中でアミカケしたもの)を呈する。天明7年(1787)に製作されたA-24墓石以降は、基本的に側面観が長方形を呈し、背面の整形度が強い形態となる。A-9墓石(元文4年=1739)の側面観は長方形となるが、これは当該墓石がA区で最も古い年代に位置付けられるものであり、丁寧に製作されたことの反映であろうと推定される。また、側面観が長方形となるものの中で古い段階に位置付けられるA-32・A-24墓石は、いずれも中尾要助妻(A-32が前妻、A-24が後妻)のものである。A-24墓石以降、位牌形墓石の側面観が、基本的にはすべて長方形に変化することを勘案すると、A-32墓石の造立年代は紀年銘である宝暦11年(1761)より若干新しくなる可能性も考慮しておきたい。

以上より、中尾近世墓地A区における凝灰岩製位牌形墓石の側面観が台形状から長方形に変化するのは1760~1780年代前後に位置付けられる。

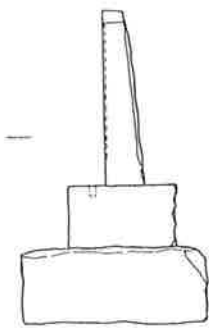
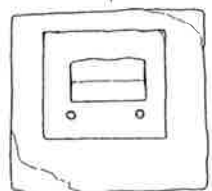
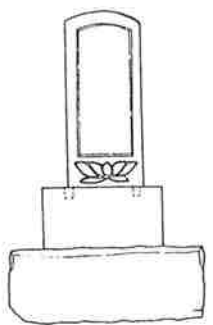
え、凝灰岩が石造物の加工に適する軟質な石材であることによる。近世墓石も例外ではなく、その大半は凝灰岩製である。ところが、豊後海岸部には一七世紀後半代を主体として、少数ではあるが、花崗岩製の墓石の分布が認められる。大分市の女狐墓地・中尾墓地にも花崗岩墓石が少数存在し、それが特徴的な現われ方をしている。

女狐墓地六一号墓の墓石は、調査担当者が「石殿形H—5型式二類」とするもので、凝灰岩で製作された石殿の内部に、同一石材で作られた位牌形の墓石が入れられていた。凝灰岩位牌形墓石には「同会 宝山宗珍信士 明暦二（一六五六）丙申九月十三日 一溪妙伯信女 承応二（一六五三）癸巳五月十九日」と、死亡時期を異にする夫婦と思われる男女2人の記載が認められた。この墓石を撤去後、下部の発掘調査を行ったところ、墓坑や人骨は検出されず、かわりに墓石2基が発見された。六一号墓下部から出土した墓石はいずれも花崗岩製の板碑形墓石で、2基それぞれに「□□□□珍信男」、「□□□□信女」の刻字が認められた。花崗岩製板碑形墓石の墓碑銘は、凝灰岩製の石殿内部の位牌形墓石の墓碑銘と一致すると考えられる。従って、六一号墓は古い段階の花崗岩製板碑形墓石を改葬し、墓石の建て直しを行ったものと思われる。六一号墓下から検出された花崗岩製板碑形墓石の紀年（明暦二年—一六五六、承応二年—一六五三）は、女狐墓地に存在する墓石九一基の中で、最も古い2基に当たる。女狐近世墓地の中で六一号墓が存在するブロックは、いずれも墓の下部に墓坑が検出されず、墓石の移転・移設が確認されている。従って、これらの墓石群は女狐墓地の中でも古い一群に相当するわけであるが、さらにその最も古い2基の墓石が花崗岩製であった。

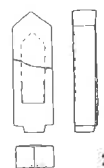
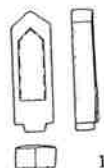
中尾墓地では、墓石三五基から構成されるA区墓地に花崗岩製墓石2基が存在する。当該墓石も中尾墓地の中では最も古い紀年をもつ2基であり、当該墓地形成の契機となった墓石である。花崗岩製墓石は位牌形で、A—一四・A—一五と呼称されており、いずれも墓石1、台石2の計3石で構成される。前者には「延宝七（一六七九）己未歳 道性了因禪定門 霊位 六月初四日」、後者には「元禄九（一六九六）丙子歳 将屋妙慕信女 霊位 七月初二日」の刻字が認められる。また、台石の間には六銅銭と思われる寛永通宝がA—一四には6枚、A—一五には2枚挟まれていた。A—一四・A—一五の被葬者は夫婦



A-15
30cm



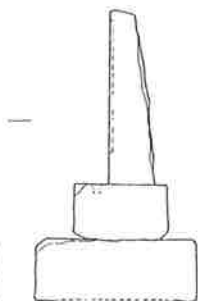
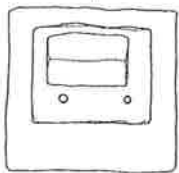
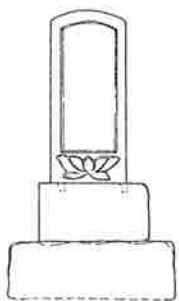
50cm



61号下



A-14
30cm



50cm

第3図 花崗岩製の墓石(1・2 女狐墓地 3・4 中尾墓地)

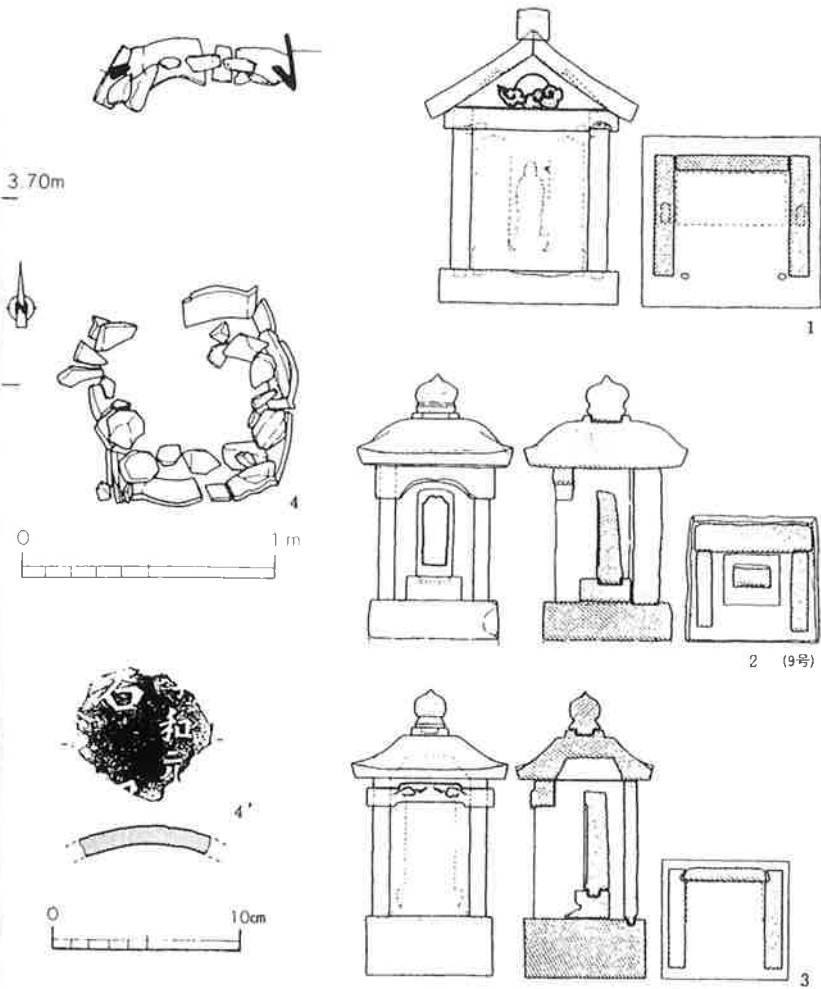
大分県下では産出しない石材を使用した墓石である。いずれもおのおのの墓地で最古の紀年をもつものであり、墓地形成の契機となった墓に使用されていた。豊後地域以外(近畿・瀬戸内地域)からの搬入品である可能性がある。

であることが想定されることやそれぞれの墓石の法量や規格がほぼ一致することから、両墓石は墓石の紀年よりやや降る一八世紀前半代に同時に建立された可能性が考えられる。三石で構成される墓石・「禪定門」の脚字・六銅銭の存在など、当該墓石を持つ墓は、中尾近世墓地の他の墓と比較してグレードの高い属性を有している。⁽⁴⁾ 以上のように、中尾墓地の花崗岩製墓石を有する墓は、同墓地の中で最も古く、最もグレードの高い属性をもつ墓であることに注意しておきたい。

女狐墓地・中尾墓地の花崗岩製墓石は、いずれもそれぞれの墓地で最も古い紀年を有するもので、墓地形成の契機となる墓石であった(第3図)。使用されている石材は表面がわずかにピンク色を帯びる花崗岩で、大分県下からは産出しないものである。岩石学的・科学的分析を経っていない今日、この花崗岩の産出地を想定することは困難であるが、可能性としては瀬戸内・近畿地方がその産地として推定される。⁽⁵⁾ 花崗岩の加工は凝灰岩のそれとは石工の系統や集団・道具などが異なるものといわれ、当該墓石が墓石の素材として搬入されたのか、あるいは墓石そのものが既製品として広域流通していたのかなど、将来の検討課題となろう。また、県下における花崗岩墓石の悉皆調査や出現・衰退の様相、さらには鳥居など他の石造物との関連など、将来の課題とすべき事象は多い。⁽⁶⁾

墓石・墓標の小地域性 本項目の最後に、墓石や墓標の小地域性について若干触れておきたい。女狐墓地で「石殿形式(H形式)」として分類されている墓石形式がある(第4図1~3)。これは凝灰岩製の宝珠・屋根・側背板・台石を組み立てた石殿形に造られたもので、内部墓石の外護施設として発達したものである。内部墓石には位牌形墓石や小児用の仏像形墓石を納めるものが多く、通常の墓石よりグレードの高い墓石形式と思われる。このような石殿形式は女狐墓地では一六五〇年代から一七九〇年代の紀年を有する内部墓石を有し、屋根の形態や側背板の組み合わせ方などより、型式学的な変遷が考えられている。当該型式の墓石は現状では大分市西部から大分郡の一部に分布が限られており、分布地域の中で型式変遷が追跡できることから、極めて地域性の高い墓石といえることができる。

また、大分市東部から佐賀関町にかけての地域は、墓標を「瓦」で製作した墓が存在する。通常、「石」で製作される墓標



第4図 石殿形墓石(1~3)と瓦囲み墓(4)
 (1~3 女狐墓地 4 久原第2遺跡)

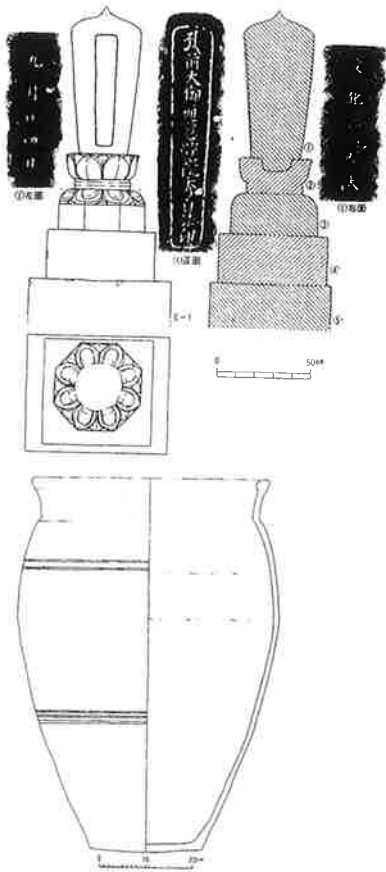
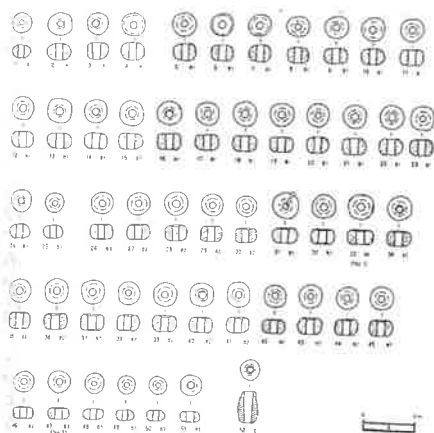
部分が瓦製(瓦質製品)なのである。私が見た墓地での瓦製墓標を有する墓は、幕末前後から明治時代にかけてのもので、屋根葺き材料である棧瓦などを使用して円形の基壇をつくり、その上に瓦製(瓦質)の墓標を立てている。瓦製墓標は通常見る墓石のサイズよりは小型であるが、墓碑銘は焼成前に刻字されている。墓標が瓦製であることの他には、通常見る墓との違和感

を感じさせないものであった。このような瓦製墓標が存在する大分市東部から佐賀関町にかけての地域は、近世段階に窯業生産が盛んであり、近世瓦をはじめ多くの瓦製品・土器類が生産されていたことと関連付けて考えると興味深い現象である。当該地域に所在する大分市久原第2遺跡^(註)では、遺構の残存状況は極めて不良なものであったが、椀瓦を方形に組んだ墓の基壇と推定される遺構が発見されている(第4図4)。特にSX5とした遺構の内部からは享和元年(一八〇一)銘のある瓦質製品の破片が出土しており、遺構の年代を示唆するとともにこれが瓦質の墓標であった可能性がある。久原第2遺跡SX5からは墓坑や蔵骨器が発見されなかったことや基壇と想定している施設の平面プランが方形であることなど、先に指摘した瓦製墓標を有する墓との相違点も認められる。しかし、当該地域での近世墓地の調査事例が少ない状況では、相違点より共通点を重視して、現状では当該遺構をこの地域における特徴的な墓の遺構と判断しておきたい。

以上のように、近世墓の墓石・墓標については、その地域の特性を示唆する地域性の強い墓石や墓標素材が存在する。大分県下ではさらに地域性の強い墓石などが、県下各地に存在していると思われるが、その把握に努めるとともにその地域性を生み出す背景についても今後検討が必要となるであろう。

下部構造(埋葬主体)の検討 ―墓坑の形態と特徴―

階層差によって異なる埋葬主体 女狐墓地では、階層差によって埋葬主体が異なる事例が報告されている。この墓地での埋葬主体のほとんどは早桶あるいは方形木棺を使用した土葬墓であるが、この中で肥前産の唐津系陶器の甕棺が使用された墓が4基存在した。4基の中の1基(七九号墓)は墓地形成の初期の段階で移設に伴って改葬された骨を集骨したものである可能性が考えられるが、他の3基(七・一〇・一六号墓)はすべて男性僧侶と考えられる墓の埋葬主体であった。一〇号墓は位牌形墓石を内部墓石に持つ石殿形墓石で、墓碑名には「大僧都」「法印」など僧侶を意味する刻字や戒名脚字が認められる。さらに、七号墓・一六号墓では上部構造である墓石が僧侶に特有の墓石形式である無縫塔が採用されており、やはり墓碑銘に「法



第5図 女狐墓地7号墓

肥前産唐津系陶器甕を内部主体にもつこの墓は、無縫塔形式の墓石を採用すること・戒名脚字に「法印」が記されること・木製数珠や袈裟金具を副葬することなど、僧侶の墓と推定されるものである。

以上のように、女狐墓地で唐津系陶器の甕棺を埋葬主体に採用する墓坑は、僧侶の墓であることが多いことが指摘される。甕棺を埋葬主体に用いることは、例えば福岡平野などの北九州地域では一般階層にも普遍的に認められるものであるが、豊後地域の女狐墓地では僧侶という限られた階層のみ採用された埋葬主体であったことを確認して

「印」の戒名脚字がみえる。また、七号墓・一〇号墓・一六号墓には例外なく木製数珠が副葬されており、加えて七号墓には袈裟金具と推定される金属製品が出土した(第5図)。いずれも、被葬者が僧侶であることを裏付ける副葬品であるといえよう。

おきたい。

早桶 近世墓を代表する埋葬主体に「早桶」がある。早桶とは埋葬時に使用された木製桶のことで、一般的には死者が生じた時に急ごしらえで作る下等な棺桶という意味をもつものである。この早桶は大分県下においては一七世紀後半代には確実に出現していることが確認できるものの、一七世紀前半代の墓の調査事例が少ないため、その出現時期が一七世紀前半代あるいは一六世紀代にまで遡るか否かは現状では明らかにできていない。ただし、ここで注意しておきたいことは、中世後半から末の段階で出現してくる深度の深い円形プランの墓坑である。

近年調査が進行している大分市の中世大友府内町跡第7次調査⁽¹⁰⁾では、人骨が残存し、埋葬姿勢が判明する中世墓2基が発見された。このうちの1基は、供献土器から一五世紀後半から一六世紀前半代に比定されるもので、成人男性の人骨が側臥屈葬の状態で検出された。推定される埋葬主体は木棺で、埋葬姿勢は中世墓に通用なものであり、伝統的ともいえる「寝棺」の形式であった。別の1基は、副葬品などが認められないことから詳細な時期決定は困難であるものの、層位や周辺の遺構の状況から一六世紀後半代に構築されたと推定できるものである。この墓は平面形態が円形を呈し、深い深度をもつ墓坑を掘削するもので、膝を曲げて座った状態の成人女性の人骨が検出されている。この墓の埋葬主体に早桶が使用されているのかどうかは埋葬棺が残存しないため、判断ができない状況であるが、少なくともいわゆる「座棺」であることは間違いない。一六世紀後半の中世段階に遡って座棺形式の埋葬が出現していることが確認される。同様な円形プランの墓坑は臼杵市の野村台遺跡⁽¹¹⁾原地⁽¹²⁾区第V調査区⁽¹³⁾や大野郡緒方町千人塚遺跡⁽¹⁴⁾でも確実に存在するようであり、中世末段階の一六世紀後半代には、寝棺とともに座棺形式の埋葬主体部が併存していることが注意される。この一六世紀後半段階における座棺形式の墓坑は、近世段階に一般的となる早桶そのもの、あるいはそれに先立つ埋葬主体の出現として、今後注意を払うべき事例であろう。また、未報告資料であるが、大分市豊後国分寺中門地区の調査で、製作年代が一六〇〇〜一六三〇年代に比定される砂目段階の唐津系陶器が副葬された近世墓が調査されている⁽¹⁵⁾。詳細は明らかでないが、深度の深い円形プランの墓坑を有するものであり、本例が大分県下に

おける早桶の出現と関わる事例であるかどうか興味深いところである。

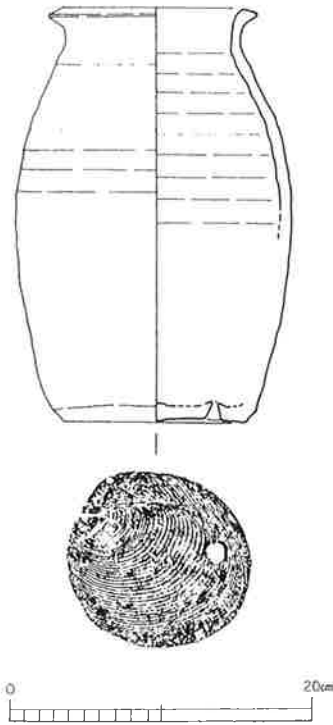
埋葬主体の消長と地域性 さて、ここで近世墓の埋葬主体の消長と地域性について触れておきたい。

大分市に所在する近世墓地の埋葬主体部は、早桶や方形木棺などの座棺が主流である。女狐墓地では一七二〇～一七三〇年代に墓地の形成が始まり、墓坑の掘削が始まった当初から早桶が使用され、明治三〇年代まで使用が継続されている。早桶が使用されたと推定される墓坑は総計一〇九基を数え、早桶以外の埋葬主体は先に触れた男性僧侶などの墓に限定される甕棺墓4基と方形木棺1基（報告書では「箱棺」と表現している）のみである。いずれも座棺形式の主体部といってよく、基本的には墓地の継続時期を通じて一貫して早桶が使用され続けている。同じ大分市に所在する中尾墓地では、やや様相が異なる。中尾墓地では墓地の形成が始まる一七世紀後半代に早桶の使用が認められ、一八世紀代を通じて埋葬に使用される棺の主体となる。ところが、一八世紀後半代から方形木棺の使用が目立ち始め、一七九〇年代以降は早桶の使用を上回り、方形木棺が急速に使用棺の主流となってくる。同様な傾向は、大分市の茨川原近世墓地(14)にも認められる。このように、同じ大分市内に所在する近世墓地では、個々の墓地によって採用される埋葬棺とその変遷に小異が認められるものの、基本的には座棺形式の棺が主体的に使用されていることに注目しておきたい。

これに対して、大分県内には座棺形式の埋葬主体が主流にならない近世墓地も存在する。速見郡山香町小野家墓地では、墓坑の平面形態が長方形を呈する墓が九〇パーセント以上を占める。良好な人骨や棺が遺存していないため、詳細は不明と言わざるを得ないが、埋葬主体は側臥屈葬の長方形木棺である可能性が高いと思われる。つまり、小野家墓地で主体となる埋葬棺は座棺ではなく、寝棺形式の木棺である。同様な状況は、直入郡久住町花立遺跡(15)でも認められ、長方形木棺の寝棺を主体部とした墓坑が一七基調査されている。周辺地域から採集された墓石は原位置を遊離したものであったが、一九世紀代の紀年が記されたものが大半であり、当該墓地の造営年代を示唆している。また、西国東郡真玉町の向畑近世墓地(16)も同様に寝棺を埋葬主体部に採用する墓地である。

上記で触れた墓地は座棺であれ、寝棺であれ、いずれも土葬墓を埋葬主体部とするものであるが、火葬墓が主流となる近世墓地も存在する。広瀬遺跡⁽¹⁷⁾は宇佐郡院内町の山間部に立地する、一八世紀から一九世紀代に営まれた近世墓地である。当該墓地は一八世紀前半代までに営まれた配石墓から一八世紀後半代以降の位牌形墓石を持つものへと上部構造を変化させるが、下部構造である埋葬主体はすべて火葬骨を納めるものである。古い段階の配石墓下のものには在地産の土師質土器である高村焼の壺・甕製品を転用したものも見られる。火葬墓のみで構成される近世墓地は、現状の大分県下の調査事例では広瀬遺跡のみであり、遺跡の所在地域周辺の民俗・風習を反映するものであるのか、それとも遺跡の個人的な事情を示しているのか現状では判断できない。広瀬遺跡の所在する院内町の近隣市町村である宇佐市域の近世墓地（虚空寺藏寺墓地・峰添遺跡Ⅱ区近世墓地⁽¹⁸⁾）では、やはり土葬が埋葬主体の主流となることから、火葬墓のみで構成される墓地やそれを営む民俗・風習は、広瀬遺跡地域周辺にのみ見られる現象なのかもしれない。

これと関連して、大分市東部に位置する久原第2遺跡の事例についても触れておきたい。当該墓地は海岸部に位置しており、



第6図 土師質土器専用蔵骨器(?)
(久原第2遺跡 S=1/5)

地山は海岸砂丘に起因する砂質土である。この遺跡では試掘段階で2基の蔵骨器、本調査段階で6基の蔵骨器と瓦囲い墓2基が検出された。蔵骨器の中には胎児の骨やベットと推定される猫の骨が出土したものが存在したが、その他のものには、骨は遺存していなかった。蔵骨器には陶器壺や瓦質土器の箱火鉢・火消し壺など日常容器が転用されているものも存在するが、蔵骨器としての専用容器の可能性

がある土師質土器の長胴壺¹⁹（第6図）も存在する。いずれも十九世紀代以降の製品である。人骨類が遺存していないため、断定が不可能であるが、これらの蔵骨器が火葬骨を納めたものとするならば、久原第2遺跡も火葬骨の比率が高い墓地であるということになる。久原第2遺跡の近世墓は、その立地から漁業民の墓と考えることができ、この遺跡の場合は火葬行為の多さを漁業民の風習として解釈できる可能性が考えられる。

民俗学・考古学の概説等では、墓やその埋葬習俗は保守的なものとして説明されることがある。この言説を近世墓に当てはめて考えてみると、上部構造の墓石等については時代相や地域相を極めて敏感に反映し、形式変化・型式変化の著しいものであることが指摘される。その反面、下部構造である埋葬主体については、その変遷が比較的緩慢なものであることが理解される。大分市中部周辺の中尾墓地や茨川原近世墓地で使用される木棺は早桶から方形木棺に変化しているものの、基本的に座棺形式の土葬を採用している点では変化がうかがえない。女狐墓地ではこの傾向がさらに著しく、一貫して早桶が使用され続ける。また、山香町小野家墓地や久住町花立遺跡・真玉町向畑近世墓地では寝棺である長方形木棺が、墓地形成時期を通じて使用され続ける。院内町広瀬遺跡では火葬骨を納めた主体部が採用され続けている。このように、埋葬法や埋葬主体部が異なる背景は、墓地が所在する地域や宗派などの管理者側の習俗によって左右されるものと考えられるが、「保守的」と表現される内容は、墓石形式や副葬品などではなく、埋葬法などに代表される埋葬習俗であったことを確認しておきたい。

おわりに

以上、極めて雑駁な検討となったが、近年調査成果が公にされつつある大分県下の近世墓地発掘調査の現状と課題のいくつかを提示してきた。

大分県下における近世墓の調査は、大名や歴史上の偉人などの特定個人の発掘調査に始まるのではなく、開発行為に伴う埋蔵文化財行政の中で遺跡と認定され、調査事例が蓄積されてきた経緯がある。そして、その中で対象とされた近世墓は、有名な

の個人墓や寺院境内墓地あるいは近世城下町の共同墓地ではなく、農村部における一般農民層の共同墓地であった。このような状況の中で近世墓地の発掘調査が蓄積されてきた地域は全国的にみても稀であり、現在文化財行政や文化財業界に携わる我々も、女狐近世墓地で培われた問題意識をこれからも受け継いでゆきたいものである。その意味でも近世墓地の発掘調査は地域の歴史を解明する上で重要な資料となり得るものと位置づけ、埋蔵文化財としての取り扱いを受ける遺跡としての認定を行うべきであろう。今後とも、墓地の管理者や地域住民の協力や理解を得た上で、問題意識をもった積極的な近世墓地の発掘調査が行われることを期待したい。⁽²⁰⁾

註

- (1) 大分県教育委員会『机張原遺跡・女狐近世墓地・庄ノ原遺跡群―九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書(5)―』(一九九六年)以下、女狐墓地についての記述は本書による。
- (2) 大分県教育委員会『中尾近世墓地―国道一〇号線旦の原交差点拡幅に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書―』(一九九九年)以下、中尾墓地についての記述は本書による。
- (3) 大分県教育委員会『小野家墓地発掘調査報告書』(大分県文化財調査報告書第一一輯 二〇〇〇年)以下、小野家墓地についての記述は本書による。
- (4) 中尾墓地A区では、三五基の墓石のうち、墓石1と台石1で構成される2石タイプの墓石構成が主体であり、3石で構成される墓石は6基(全体の十七パーセント)に留まる。また、成人男性を表す戒名脚字は「信土」が大半であり、「禅定門」の脚字を有するものはA―1四墓石のみである。さらに六銅銭を有するものも、A―1四・A―1五を含めて5基(全体の一七パーセント)に限られる。
- (5) 奥田尚「高野山町石の石種と採石地について」(『古代学研究』一五〇 古代学研究 二〇〇〇年)で触れられている黒雲母花崗岩(広島型花崗岩)に相当するものである可能性も考えられる。

(6) 花崗岩墓石は豊後海岸部に多く、一七世紀後半から一八世紀前半代に分布の主体があるような印象を受ける。また、同様なことは同じく大分県内に産出しない石材を用いた砂岩製墓石についてもいえ、やはり豊後海岸部や県南地域を主体に分布しているようである。佐伯市に所在する萩山周辺近世墓地では砂岩製の墓石が散見できることが報告されている。佐伯市教育委員会『萩山遺跡群―萩山地区区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書―』（二〇〇一年）

(7) 吉田寛「豊後における明治時代前半の瓦当文様―「藏惣」の刻印を有する軒平瓦―」（『おおいた考古』第6集 大分県考古学会 一九九三年）

(8) 大分県教育委員会『横塚第2遺跡・久原第2遺跡―大在土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書―』（一九九九年） 以下、久原第2遺跡についての記述は本書による。

(9) 櫻木晋一「九州における近世墓調査と六道銭」（『西日本近世墓の諸様相―第9回関西近世考古学研究会大会―』関西近世考古学研究会 一九九七年）

下村智「北部九州の近世墓に使用される棺甕について」（『先史学・考古学論究―熊本大学文学部考古学研究室創立二〇周年記念論文集―』一九九四年）

(10) 田中裕介氏のご教示による。

(11) 神田高士「臼杵荘期土器の再検討―その1 野村台遺跡出土遺物を検討する―」（『大分・大友土器研究会論集』大分・大友土器研究会 二〇〇一年）で遺構平面図と出土遺物実測図が公表されている（三六―三八頁）。

(12) 大分県緒方町教育委員会『千人塚遺跡―緒方町総合運動公園建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書―』（一九九九年）

千人塚遺跡では一六世紀後半から末に比定されているⅣ期で、寝棺形式と座棺形式の主体部が併存している可能性が高い。

(13) 玉永光洋「豊後国分寺跡」（『大分市埋蔵文化財調査年報1』（一九九〇年）に短報がある。

(14) 大分県教育委員会『玉沢地区条里跡―ガランジ地区・茨川原近世墓地・田仲寺地区―』（一般国道四四三号（木の上工区）道路改良工事

に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書―大分県文化財調査報告書第一〇五輯 二〇〇〇年)

(15) 久住町教育委員会『市第IV遺跡・トグウ遺跡・花立遺跡―県営担い手育成基盤整備事業都野東部地区に伴う発掘調査報告書IV』(二〇〇〇年)

(16) 真玉町教育委員会『真玉地区遺跡群発掘調査概報』1(一九九四年)

(17) 大分県教育委員会『宇佐別府道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書(II)―切寄遺跡・サヤ遺跡・妙見城遺跡・両川遺跡・小坂遺跡・井手ノ原遺跡・広瀬遺跡・小原南遺跡』(一九九四年)

(18) 宇佐市教育委員会『一般国道一〇号 宇佐別府道路建設に伴う埋蔵文化財調査報告書 虚空蔵寺遺跡・切寄遺跡・下林IV地区』(一九九五年)

大分県教育委員会『一般国道一〇号 宇佐別府道路埋蔵文化財発掘調査報告書(2) 桐ヶ迫遺跡・峯添遺跡』(一九九四年)

(19) 短く外反する口縁部を有する長胴壺で、巻き上げ整形によって製作されている。底部には糸切り痕が認められ、焼成前の穿孔がなされている。当初は遺跡の立地する環境から、土師質土器の蛸壺である可能性を考えていた。近年、調査された速見郡日出町の城山遺跡からも同様な土師質土器長胴壺が、蔵骨器として使用された状態で出土されている(未報告)。城山遺跡も海蝕洞穴の遺跡であることから、当該製品が本来蛸壺として製作され、蔵骨器に転用された可能性も考えられる。本製品の用途が蛸壺なのか、蔵骨器の専用容器であるのか、将来の課題としておきたい。

(20) 文化庁が毎年主催・開催している発掘調査速報展「発掘された日本列島」の昨年度の開催会場に、大分県竹田市稻荷谷近世墓地から出土した陶器製の飯事道具や印刷ブローマイド(?)かと推定されるガラス板に挟まれた印刷婦人画像が出品された。これらの副葬品は一部が明治時代に降る可能性があるものの、近世墓地出土の副葬品として、全国7つの開催会場を巡回した。このように、近年実施されている近世墓地の発掘調査では全国的な注目を集める調査成果を提出するものも少なくない。当該墓地の調査成果は、現在その一部が公にされているに過ぎないが、展示された副葬品のみならず、墓地の構造などについても興味深い遺跡であり、本報告の刊行が待たれる。

文化庁編『発掘された日本列島二〇〇〇―新発見考古速報展―』(朝日新聞社 二〇〇〇年)

城戸誠「稻荷谷近世墓地群の調査成果と特徴」(『考古学ジャーナル』四六四 二〇〇〇年)

また、中・近世墓については、中近世の村落史の一属性として扱われ、その景観や変遷について開発史の中で扱われる事例も増加している。左記文献を参照されたい。

小柳和宏「墓地の類型と変遷―中世を中心として―」(『豊後国都甲荘の調査』本編 大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館 一九九三年)

後藤一重「波多方の石造品と近世墓地」(『豊後国田原別符の調査Ⅲ』大田村文化財調査報告書3 大田村教育委員会 一九九五年)

さらに、本稿では、考古学的な側面である六道銭の問題・墓地構造・被葬者の階層性・中世墓との継続性や断続性・近世墓の終焉などの問題や歴史的な側面である寺請制度との関連性など、重要で様々な問題を指摘できていない。今回は筆者が認識できた本文中の事象を記すに留め、今後の検討課題としておきたい。